

首都圏段戸会 会報

令和7年9月
第54号発行責任者
首都圏段戸会
会長
内山田 邦夫
編集者
広報担当
織田 利彦

会長挨拶

首都圏段戸会会長

内山田 邦夫 (高21回)

岡高時代、今でも鮮明に覚えている授業がありました。男子クラスの倫理社会の最後の授業で、殺伐とした男子クラスを憐れんでか、先生が今後心すべき大事な三つのことをお話されました。

一つ、ルソーの「エミール」を読む。同書は若きエミールの成長と学習を描いた教育啓蒙書です。大学に入って教育学を受けたら、参考図書トップにエミールが挙げられており、嬉しくなりました。エミールは、その後の「発達心理学」に大きな影響を与えたそうです。

二つ、男女は「不調和の調和」が最善。これは直接的には、自己の価値観・経験を相手に押し付けるな、ということ。今風に普遍化すれば、人は多様性からこそ学び得る、ということでしょうか。

三つ、美人とは、女性の魅力とは、何か。

男子クラスではこの教えが一番受けました。が、学習指導要綱を逸脱した超主

観的なお話のようでもあり、詳細は割愛します。

他方、現代社会では、(思考停止のエンタメ番組やネットの影響で) 脳が受け身化している、脳が「ジャンク情報」「フェイク情報」漬けになっている、などの問題状況があります。

スウェーデンの精神科医のベストセラー「スマホ脳」によると、ビル・ゲイツやステイブ・ジョブズらは、ネットやスマホが思考力や成長に有害であることを熟知し、自分の子供たちには14歳になるまでスマホ等を使わせなかったし、



その後も利用時間を限定したとのこと。発達心理学の見地からは、スマホの脅威等から如何に脳を守るべきか？

翻って、わが首都圏段戸会は、リアル世界での交流、生身の活動に価値を置いています。

「ジャンク情報」「フェイク情報」に對抗するには、信頼できる集団や情報媒体に接するのが一番。幅広い世代の、様々な照射角を知ることができそうです。

段戸会は、正に倫理社会の先生が説かれた「不調和の調和」、と言うか多面性、多様性が経験できる貴重な機会です。また、発達心理学は、学習を「人生の正午」(ユング) までに限定せず、人生後半を含む一生涯の課題としています。総会やフォーラム、サークルは、そうしたニーズにも対応するべく努力しています。会員各位にあつては、気軽に、かつ、好奇心旺盛に是非参加されますよう、願っています。

段戸サークルのお問合せ先
皆さまの参加をお待ちしています！

- “段戸囲碁会”
(幹事：早川 慎吾 高32回) hayakawa@a00.itscom.net
- “段戸音楽会”
(幹事：石川 航己 高58回) koki.ishikawa.49@gmail.com
- “段戸句会”
(幹事：野村 親信 高16回) nomurac@jcom.home.ne.jp
- “段戸山の会”
(幹事：石川 定雄 高30回) s_ishikawa44@b04.itscom.net
- “胃文化交流会”
(幹事：小出 一典 高33回) kazunori.koide72@gmail.com
- “副業推進会”
(幹事：加藤 研一 高30回) katosoke@gmail.com

「首都圏段戸会」は愛知県立
岡崎高等学校の首都圏同窓会です。

公式ホームページ

<http://dandokai.o.oo7.jp/>

首都圏段戸会

検索



パソコンやスマートホンが不得意な方も、お子さんやお孫さんに操作を頼んで、一度ホームページを訪ねてみて下さい

第53回首都圏段戸会総会・懇親会のご案内

●日 時 令和7年10月25日（土） 13:00～17:00
（受付12:30～）

●場 所 アルカディア市ヶ谷（私学会館）（右地図参照）
千代田区九段下北4-2-25（TEL 03-3261-9921）
JR市ヶ谷駅から徒歩2分
地下鉄市ヶ谷駅（有楽町線、南北線、都営新宿線）
から徒歩2分



総会、講演会はオンライン配信（Zoom）されます。今回より懇親会の一部も配信する予定です。
当日はカジュアルな服装をおすすめします。

— 総会・懇親会はお早めにお越しください —

受付は世話人が対応しておりますが、担当の方々も会員の皆様同様に講演会や懇親会を楽しみにしております。
このような事情をご賢察のうえ、できる限り早めに（13:30頃まで）受付をお済ませいただくと幸いです。
会員の皆様のご理解、ご協力をよろしくお願いします。

●講演会 タイトル：能面が教えてくれる『顔とは何か』
——見えないものを見る力
講 師：麻生 りり子（菅井 麻衣子（高45回））
能面師・脚本家・顔研究者

（略歴）

愛知県岡崎市出身。1997年、東京女子大学卒業。二児の母。
2008年より執筆を始め、ミュージカル・舞台・ドラマ・イベントのシナリオを手掛ける。2012年科学ドラマ大賞・大賞受賞（JST）。『ママはロボット』TVドラマ化（BSフジ）。2018年より能面師・中村光江に師事。2021年能面公募展で入賞したのをきっかけに、主に観世流舞台で使用されるようになる。能面を用いたアート作品を展開し、NYタイムズやCNNなど国内外のメディアで注目される。2020年より日本顔学会に所属し、能面という顔をテーマに研究発表を重ねる。顔学会ニューズレター編集委員として、公式サイト内動画コンテンツにてインタビュアーを務める。



●懇親会 総会終了後、ゆったりと談話ができる「着席バイキング形式」で懇親会をご用意しております。なお、会費のお支払いは現金でお願いします。

会費：7,000円

ただし、以下の方には特別割引があります。

若手会員（高63回以降）	5,000円
学生会員（高63回以降の大学、大学院、専門学校等の学生）	2,000円
※事前に「学生会員」で登録した人のみに適用	
介助のためのご家族	1,000円
同伴ご家族（中高生）	1,000円
同伴ご家族（小学生以下） 無料 ※簡単なキッズコーナーをご用意します。	

●招聘恩師（予定：敬称略）
生田 省三（英語） 三井 健（英語） 黄 永顕（保健体育）

インターネットによる 出欠回答を導入します

今年の総会・懇親会では、ハガキによる出欠回答に加えて、インターネット経由でも出欠回答を受け付けることとしました。メールアドレス登録済みの会員に出欠回答依頼のメールをお送りします。メール中のリンクをクリックすると、氏名入力済みの個人専用の回答ページが開きますので、出欠を入力してください。通信欄も設けていますので、連絡先変更や世話人への連絡事項を記入いただくことができます。

最近、詐欺などの不正目的で個人情報を入力させるメールが増えていますが、この出欠回答依頼のメールのリンク先では個人情報を入力を求めることはありません。ご心配な点などあれば、ホームページの「お問い合わせ」ページから連絡をお願いします。

件名(S) 【首都圏段戸会】総会・懇親会（10月25日）の出欠回答依頼

様

首都圏段戸会・総会懇親会を2025年10月25日に開催します。詳細は首都圏段戸会ホームページまたは会報をご確認ください。

従来からのハガキによる出欠回答に加えて、今年からインターネット経由でも出欠回答いただけるようになりました。ネット回答をご希望の方は以下をクリックして表示される回答ページから出欠予定をお知らせください。

<https://docs.google.com/forms/g>

ここをクリック

回答に際して以下にご注意ください。ご協力をよろしくお願いします。

- ・複数回の回答をいただいた場合は、最新のものを優先して受付を準備します。
- ・このメールは他の同窓生には転送しないでください。メールアドレスを登録している首都圏段戸会会員には本人専用の出欠回答用メールを発信しています。

首都圏段戸会 副事務局長・会員担当世話人

首都圏段戸会から発信するメール（サンプル）

首都圏段戸会総会・懇親会出欠回答 フォーム

2025年10月25日(土)の首都圏段戸会総会・懇親会の出欠を回答してください。

お願い：

- ・予定変更の場合は再度入力してください。最新の回答を優先して受付を準備します。
- ・「氏名」と「管理番号」の欄は書き換えないでください。お名前が変わった場合は通称欄でお知らせください。

suga.shimoke@gmail.com アカウントを切り替える

共有なし

*必須の箇所です

出欠を選んでください。*

☐ 会場出席

☐ オンライン参加

☐ 未定

☐ 欠席

学生会員（高3回以降の大学、大学院、専門学校等の学生）に該当する方はチェックを入れてください。

☐ 学生会員

通信欄（住所・連絡先の変更、世話人への連絡など記入してください）

回答を入力

氏名（この欄は変更しないでください）

出欠回答ページ（サンプル）

手ざわり感のゆくえ

高64回 扶瀬 聡史

人生ということばで人生を要約したくないけれど、あの頃の私は人生における「正解」みたいなものを信じていた気がする。愛知県みよし市で生まれ育ち、岡崎高校に入った。将来は官僚になって、定年後は社外取締役という名の天下りをして悠々自適に暮らす、そんな退屈で安定した未来像を本気で思い描いていた。岡高には優秀で器用な人がたくさんいて、私自身もその空気の中で、どこか「かしこい生き方」に納得していたのだと思う。将来やりたいことなんて特に決まっていなくてもいいので「とりあえず東大」という言葉が聞こえてきた。皮肉な言葉だったが、批判もできなかった。海外で働きたいという思いから、フランスにある石油開発会社に入った。雨の東京でビニール傘の渦に飲まれる毎日よ



1年かけて古民家をなおした

りも、世界のどこかで自分の存在が明らかに実感できる環境に身を置きたかった。羽田空港では「この国を背負う商人」のような、おかげさなブライドを背中に感じ、シャルル・ド・ゴール空港に降り立れば「物語の中の小さな主人公」になったような気概に満ち溢れた。仕事には、自分の存在意義を明確にしてくれる構造がある。お客さまに喜んでもらえることこそが、自分がそこにいる意味になる。それはプロジェクトのボスであっても同じことであった。そうした関係性のなかでは、期待に応えることがなによりも重要であった。そこには、誇りを感じられる瞬間があり、心地よい緊張感があり、プロとしての矜持が確かにあった。アップロードアウトの非情なルールの中で、レイオフの不安に晒されながらも、なお求められ続けること。ただ目の前の仕事に没頭することで限りなく満たされる。空虚の裏側にある、圧倒的な承認が、私の背中を支えていた。

けれど、コロナ禍ですべてが止まった。国境は閉ざされ、仕事は突然フルリモートに切り替わった。会議は画面越しの顔と声だけのものになり、ボタンを押せば簡単に消えるその光景には、もはや「手ざわり」の欠片もなかった。ともに働いた仲間たちはレイオフの渦に飲まれ、人とのつながりも希薄になった。アップロードアウト。



ひとつずつ、たしかめる

家を借りた。友人に近況を話す度に、「どうして？」と理由をきかれたが、実際のところ何が起きたのかはよくわからない。あのタイミングで東京をやめることは、私にとってクールな選択のように思われた。マスクをすることは、木々に囲まれた悠久の時間の中ではあまりに不釣り合いであった。そんな畑と隣合わせの暮らしの中で、「コヨム」という暦で読むニュースレターを始めた。誰に頼まれるでもなく、暦に合わせて感じたことをレターとして配信する。ちっぽけな物書きだけれど、人生ではじめての、自己表現であり、自己責任であった。

そしていま、コヨムと同じく誰に頼まれるわけでもなく、and farm. という小さな会社を営みはじめた。地域に根ざし、畑に囲まれた暮らしのなかで、都市にいた頃の合理的な正解とは異なる道を歩いている。かつて信じていた優等生的なルートからははずれた先に、この道があった。ここでは、空虚を批判することはできない。すべての決定は自分に返ってきて、すべての表現に対する責任も自分が引き受ける。里山に眠る空き家や耕作放棄地を活用してきたから、周囲からは「社会課題を解決している」と評価されることが多い。けれど究極のところ、事業というのは自分のためにやっているのだと最近思う。「社会が」とか「日本が」といった大きな主語がにがてだ。上場を目指すわけでもなく、ただ地域にある小さな営みの中で、人間らしく生きていきたいだけなのだ。

振り返ると、

前の仕事でも、人間としての生々しい感動を覚える瞬間があった。東シナ海にぼつんと浮かぶ掘削施設で、地下3000メートルから原油を汲み上げる光景に、私は圧倒された。3億年前の有機物が目の前に現れる。その事実の前では、地球温暖化の文脈も、サステナビリティの言葉も、いったん脇に置けなかつた。

地球という大きな存在を前にその場にあるすべてが、美しかった。私たちは、より良くあらうとしすぎているのかもしれない。サステナビリティ、リジェネラティブ、脱炭素、どれも正しそうに見える。仕事も生活も、「正解」をどこか外部にアウトソースしてきたからこそ、分かりやすい正解にすがりたくなる。今では生成AIにかかれ一瞬で、驚くほど完成度の高い答えが提示される。迷いも葛藤もなく「正しそうなもの」が出てくる。けれどそこに、人間が生きて感じるゆらぎやあいまいさが入り込む余地があるのかどうか、私はときどき不安になる。善意の圧力に疲弊してしまう。

私はいま、手で土に触れている。鉄の重みを感じる。一見自然と隣接した畑の営みが人間の手が加わった自然ではない自然だということを知っている。厩に沿って紙とペンでレターを書く。古民家を解体して壁や天井の裏側に私たちの暮らしをひっそりと支えていた柱や梁を発見する。誰かが拒んだレジ袋が本当は地球の圧倒的なスケールの営みの結果であることを知っている。山に狩猟に入り灰かに香る命の存在に興奮する。非効率で、不器用で、だけど確かにそこにある感覚。効率的にかしく生きてきてしまった31年間で「ない」とされてきたものをひとつずつ確かめている。手ざわり感のゆくえ。ようやく暮らしの中で確かめられるようになってきたところだ。

『能面師が語る——能面という「顔」がわたしに教えてくれたこと』

高45回 菅井麻衣子
(筆名・雅号 麻生りり子)

皆さんは「顔」と聞くと、何を思い浮かべますか？ 目鼻立ち。感情や性格が外部情報として現れたもの。ある人物をその人と認識するアイコン。あるいは職業や立場もその人物のもつ「顔」と言ったりしますね。

私は現在、『能面という「顔」から、人間という存在を探る』をテーマに、能面師、脚本家、顔研究者という三つの顔をもつ活動しています。

長らく脚本という形式で登場人物の「顔」を描き出すということをしてきました。後に能面と出合い、この静かな「顔」は、沢山のことを私に教えてくれます。

——顔とは何か。その問いに吸い込まれるように、日本顔学会に所属し、顔研究者として、観察や実験、研究を重ね、それをまた能面や脚本にフィードバックし、表現することを行っています。

今回、首都圏段戸会役員・世話人の皆様から、これらの活動に興味をもっていただき、会報誌への寄稿と総会での講演のご依頼を賜りました。特に「能面師」という耳慣れない職業に興味津々とのことなので、今回は特にそこに焦点を当ててお話ししたいと思います。

能面とは、日本の伝統、総合芸術たる能で使用される仮面です。その能面を制作、補修し、文化を継承する役割を担っているのが能面師です。能面を作ること「面を打つ」というので、面打ち師とも呼ばれています。

皆さんは能面についてどんなことをご存知でしょうか？ 実は、私はというと、面打ちを始めるまで、能面についてほとんど何も知りませんでした。無表情の比喻表現に用いられる。映画や小説や漫画などでおどろおどろしいモチーフとして登場する。あとは、白い顔をした女の面と般若の面が日本家屋に並べて飾られているようなぼんやりとしたイメージ。その程度のものでした。実際の能面のことを何も知らぬままこの世界に飛び込んだのです。

最初に驚いたのは、能面が木の塊から彫り出されることでした。素材は、檜です。鉋や鋸、木槌や鑿をふるって、余分なところを取り払っていく。一転して、彫刻刀で細部を彫り進めていくのは、精緻で繊細な営み。

では、ちょっとここで問題です。能面の素材に檜が用いられるのは、なぜでしょう？ 数ある材木から檜が選ばれているのには三つの理由があるのです。

一つ目は、今申し上げたように、能面は手彫りで制作します。よって、硬過ぎでは彫ることができません。逆に、柔らか過ぎる木も精緻な彫刻に向きません。程よい硬さであることが条件の一つに上げられます。二つ目に、能面は舞台の小道具であるので、耐久性が求められます。檜は耐久性に優れ、数百年前につくられた能面が、現在も能舞台で使用されています。三つ目は、軽さです。能面は、能楽師が顔につけて長時間舞台に立ち、踊り、舞います。重くては頸椎を痛めてしまうことでしょう。そのため、軽さというのでも重要な要素です。これらの条件をバランスよく満たすのが檜だったというわけです。

それから驚きだったのは、能面は無表情どころか、表情を豊かに変化させることです。



岡高出身音楽家・美術家による「絵と音が出逢うとき」展示作品

表情が変わるお面なんて、世界中を探しても、能面だけではないでしょうか。能面の中でも、女面は特にこの特徴が顕著に表れます。なぜ能面がこのような特徴をもつて作られたかといえば、能舞台で役者の「顔」として機能するためでしょう。能面は、「オモテ」と呼ばれます。オモテとは、まさに「顔」を意味しますよね。能面は、「顔」として表情変化のポテンシャルをもつてつくられているのです。そのわかりやすい最たる例は、動く視線でしょうか。

能面を上方向へと傾けてみましょう。すると、能面はゆっくりと瞼を持ち上げ天井を見上げます。次に下方向へ傾けると、瞼をとろりと落とし、目を伏せるのです。右へ向ければ視線も右に、左へ向けば視線も左へ。実際には瞼を動かすはずのない木彫りのお面です。ご覧になった方は皆さん驚かれたり、感心されたり。このような錯視を生む技巧が能面には施されています。皆様にもぜひ実物でこの視線の動きを体感していただきたいです。では、このような能面はどのようにして作られるのでしょうか？ この技法を編み出したのは、数百年前の能面師です。能の創成期には様々な種類や形の能面が創作されました。江戸以降は専ら「写す」という手法が中心になってきます。これ

は、元になる面とそっくり同じ面をつくるということです。写すことで古来から伝わる型を継承し、技法も受け継がれていきます。

面打ちを始めて私が最初に打った女面の「小面（こおもて）」も、ちゃんと上へ下へと視線を動かします。当時の私は、能面の視線が動くことも、どのようにしたら動くように作れるのかもわかっていませんでした。知らずとも、「写す」ことで、数百年前の能面師が編み出した視線の動く能面を、今、目の前にある木材に再現できたのです。そして、繰り返し写すことで、私はその技法を我が身に写し取る、まさによく言うところの『学ぶは真似ぶ（まねぶ）』です。もちろん今は、目が動く仕組みや技巧を理解して制作しています。

能面からは日々新たな発見があり、そこから展開し、私の内なる「顔」という宇宙は拡張し続けています。伝統の枠を拡張した創作面は、おかげさまで国内外で大好評をいただいています。来る十一月に早稲田大学で開催される『フォーラム顔学2025』では、能面の陰翳が生む表情についての研究発表と、TOPPAN様との共同研究発表を予定しています。仮想空間につくった光源を3D能面に当てて、表情変化をあぶり出す試みです。一般の方にもご参加いただけますので、ご興味のある方はお出で下さいませ。総会では「能面」という不思議な「顔」を通して、私が出会ってきた問いや発見を、皆様と直接共有できればと思っています。



「写す」とは能面による自己増殖の営み

その答えのかけらを、実際の面の表情や視線の動きとともに、体感していただけたら幸いです。

雑誌編集者

まさかの人生

高21回 太田 隆二

高校を出て岡崎を離れてから5年後の1975年、私は東京暮らしを始めた。今それからいつしか半世紀がたった。

思えば遠く来たもんだ
中原中也の詩句である。武田鉄矢の歌ではない。

この1975年、希望した出版社（小学館）に就職できたものの、最初に配属された部署は「週刊少女コミック」編集部。少女マンガ雑誌の編集をやるなんて高校以来、部活動で硬派の気風を身に付けていた私には驚天動地のことであった。それでも小学校時代から親に隠れて貸本屋（八幡町にあったサザエ書房）に日参していたほどのマンガ好きであったし、上司から最初に担当を命ぜられた市川みさこの連載『しあわせさん』は男の私にもわかるギャグマンガでもあったので、すぐに彼女との打ち合わせを楽しめるようになった。

しかし、次いで担当を命ぜられたのが、マンガ界の巨匠、手塚治虫の連載であったの



1976年春、人気マンガ家の萩尾望都の単行本即売サイン会のアシストを務める

には仰天した。

■神様の伴走者

21世紀に入り、日本発祥の「manga マンガ」は、今や文学、映画、美術、テレビなどと肩を並べて、世界に通用する表現メディアとなっているが、戦後の日本でそのマンガ表現を創り上げたのが手塚治虫である。

ちょうど私がこの原稿を書いていた時、詩人の谷川俊太郎の訃報がもたらされた。テレビのニュース番組でこれが報じられる際、谷川はテレビアニメ『鉄腕アトム』の主題歌を作詞した人だと紹介されていた。

詩業の紹介ではない。♪空を越えてラララ星の彼方へ、とアナウンサーが『鉄腕アトム』の曲と絵を流しながら谷川の人となりを説明したのは、テレビの視聴者にはこの手塚治虫のアニメ作品のほうが通じやすかったからだ。まさしく手塚こそは戦後の日本メディアのチャンピオンなのである。

しかし私がこの世界に足を踏み入れた70年代の頃は、まだマンガは低級な娯楽とみなされていた。私がマンガ雑誌、それも少女マンガ週刊誌の編集者になったことを知った岡崎の私の父はずいぶんガツカリしていた、と後に母から聞いたものである。

とはいえ、なじみ深いマンガの世界に足を踏み入れた私は、少女物という勝手の違う分野に戸惑いながらも、誌面作りに没我し、20代後半の6年間で疾走した。当時、手塚治虫の担当者は「手塚番」と呼ばれるほど、業界では特別な存在だった。その仕事の過酷さは、2018年に出された『手塚番／神様の伴走者』という本において、死屍累々というべき担当編集者の生活の惨状が記されている。私が手塚番となった75年の7月、手塚

は週刊誌に『三つ目がとおる』『ブラックジャック』『シュマリ』の3作、月刊誌には『ブッダ（仏陀）』を連載し、その合間に読み切り作品を発表していた。同時にこの頃、講談社から全四百巻というとてもないボリュームの『手塚治虫漫画全集』の刊行が始まり、手塚はその校正にも追われていた。

そこに、私が担当する『虹のプレリユード』の連載を押し込んだわけなので、原稿の受け取りはまともなものではありえない。近年では、原稿の授受は電子送稿で行われているそうだが、私の手塚番は、赤塚不二夫などが作品中に差しはさんで笑いのめした「編集者残酷物語」の惨憺たる日々であった。



手塚治虫が他界した1989年、『虹のプレリユード』が週刊少女コミックで特別付録として復刻された

■高校時代に遭遇した日

手塚番を終えた後の5年間に私が経験したマンガ家の担当の仕事ぶりとは異なり、手塚番は、彼と顔を突き合わせて内容の打ち合わせをするというようなことはない。苛烈な執筆に追われる彼から画稿を手渡されるまで、ひたすら待つて待つて待ち続ける生活なのであった。

手塚とアシスタントが原稿を描く仕事部屋の隣にある応接室が、私のすみかだった。私の横には『ブラックジャック』担当の青木くんがいつも座っていた。彼も秋田書店の新入社員で、私と同様、手塚にしがみついて離れないよう上司に命ぜられていたのである。

8月に入った日の早朝、ソファでいっしょにまどろんでいた私と青木は手塚に

ゆすり起こされた。

今から会津若松に行きたいと手塚は二人に告げた。年に一度の家族旅行で、すでに家族は先発し温泉に逗留しているのだが、彼は一家の長として、どうしても合流したいと駄々をこねたのである。

手塚が仕事場から逃走する話はいくつも聞いてきたが、この時、マンガの神様が家族を持ち出してたつての願いをするのを、年若い二人の編集者が断ることなどできるはずもなかった。手塚プロ専属のドライバーが運転する車で手塚がぐささま出発するのを、私は青木が急きょ手配したハイヤーで追いかけることになった。

現地に着いた私は驚いた。8年前、岡崎高校2年生の時の修学旅行で、同級の皆と泊まった東山温泉だったのである。

■不思議だ

この温泉宿の一室で、手塚が描いていたのは連載初回の冒頭に入るカラー4ページで、東京にいるアシスタントの手は借りられなかった。これを私が受け取って東京に戻ったのは、二日後の夜中だった。

それから以降の酷烈な一月半については、昨年上梓した小説集『手塚治虫を追え!』で詳しく書いた。

実は私はマスコミを狙った就活において、もう一つ、大阪の関西テレビにも合格していた。こちらに行くか、東京の出版社か、その選択には死ぬほど悩んだ。

結局選んだ東京で、マンガの神様と出会ったことは、その意味では偶然と言えは偶然なものだ。だが、あの辛かった日々を私に送らせた作家が、いつも笑顔で「太田さん」と呼びかけていたことがいま脳裏に浮かぶと、彼との邂逅は人生の必然であったかのように感じるのが不思議である。

私は編集という仕事を34年続けたが、その世界に飛び込んだばかりの手塚番の3か月間は、その後味わう編集経験のすべてを凝縮していたように思える。

会社を退職して日がな一日無聊に倦んでいる昨今、こんな馬車馬生活の人生を選んでよかったのか、とずっと煩悶していた二、三十代が懐かしい。感無量というのはこんな老残の思いをいうのか。

朝の水が一滴、ほそい剃刀の刃のうえに光って、落ちる——それが一生というものか。不思議だ。

(北村太郎「朝の鏡」)

段戸サークル活動報告

山の会 — 登山 —

高30回 石川 定雄

2024年、春は比較的近場にあつて今まで登っていなかった丹沢・大山日帰り登山、夏と秋は以前に登った山への再訪問として北アルプスの白馬岳、尾瀬の至仏山に登り、晩秋にはここ数年恒例になっている富士山の眺望を楽しむハイキングとして南アルプス前衛の甘利山のハイキングを行いました。2025年春の日帰り山行は、駿河湾フェリーで清水港から西伊豆の土肥港へ向かい、到着後、伊豆の達磨山ハイキングコースを歩き、一日中、富士山の姿を楽しもうという計画でしたが、あいにくの雨となり、心の中で富士山を見ながらの山行となつてしまいました。達磨山では、登山口到着時激しい雨が降っていて、私自身は雨が止



駿河湾フェリー船上にて（筆者は左から4人目）

むまで待ちたいなと躊躇していたのですが、みんなが雨具を着け、行く気満々な様子に勇気付けられ、少し小降りになった雨の中に飛び出すことになりました。歩き出せば、周りには立ち込める雲と、時折、姿を現す山々の幻想的な自然の芸術に心を魅了され、歩けることが嬉しくて仕方なく、山頂に立ったときのみんなの満足感あふれる微笑みも大変良い思い出になりました。そして、帰り道では今度の秋にもう一度、逆コースを取り、清水港で美味しいものを肴に一杯やろうということになりました。この投稿が会報に載る頃には、この計画を実行しているかもしれません。こんな山の会ですが、気になる方、ぜひ一緒にいかがでしょうか。

『山の会登山隊ついに原宿交差点ハラカドに登頂！昭和から令和の名建築をめぐる散策』

高34回 板谷 敏正

最初に目指したのは東京オリンピック2020で建設された新国立競技場。「負ける建築」を設計思想とする隈研吾氏の

作品だけあって、奇抜な形ではなく緩いカーブと木造の庇で構成された外見は神宮外苑の緑や風景に溶け込んでいました。脇には2020で利用された聖火台も展示されており、遅ればせながらオリンピック参加気分を味わいました。

登山隊はさらに青山から原宿方面に遠征。TEPIA（横文彦）、塔の家（東孝光）、サニーヒルズ（隈研吾）、青山鉄仙会館（内藤廣）、表参道ヒルズ（安藤忠雄）PRADA（ヘルツォーク&ド・ムロン）など数々の名建築を踏破しました。最大の難所は2024年に原宿交差点にオープンした東急プラザ「ハラカド（平田晃久）」。ガラスに覆われた斬新な建物は若者カルチャーの最高峰ですが、登山隊は無謀にもこのハラカドの登頂に挑戦。若者とインバウンドの波に押されながらも持ち前の忍耐力と協調性で隊列をたもちながら進行。スピードの速いエスカレーターに戸惑いながらも無事屋上に登頂しました。いずれにしても登山隊が原宿で完全に浮いていたことは多分間違いないと思われます。

夕焼けの頃、前回のオリンピックで建



東急プラザ「ハラカド」にて（筆者は左から2人目）

胃文化交流会

高33回 小出 典

2025年3月7日金曜日の夕刻、1年4ヶ月ぶりに胃文化交流会を開催しました。場所は小生行きつけの青物横丁のお寿司屋さん「鮎両」です。同店は、ウルトラスーパー食いしん坊の小生が気に入っている魚屋の「魚富士」に程近い、旧東海道沿いに位置します。この旧東海道沿いには安くて美味しいお店がまだまだたくさんあるハズと、良い店発掘欲が大いに高まってしまっており、（苦笑）。さて、このお店はカウンター7席、テーブル8席のこじんまりとしたスペースながら、両角さんと言う昔の映画俳優の様なイケオジが大将を

設された国立代々木競技場（丹下健三）に到着。昔とかわらないダイナミックで優美な姿は、高度成長期の日本の豊かさと伸びやかさをあらためて感じさせるものもありました。登山隊はその後渋谷の街で大宴会。店員から「静かにしてください」と3回注意されるなどの武勇伝も残しながら充実した一日を終えました。その後家に帰って、「ハラカドに行ったんだよ」と子や孫に自慢したのは小生だけではないと思います。



国立代々木競技場前にて（筆者は右端）

たつて真面目な紳士淑女ばかりなのですが、コスパの良い、激ウマの料理やお酒で、毎回は大盛り上がりしています（笑）。参戦ご希望の方は次回是非エントリー下さい。



く神」でしたが、ご高齢で閉店されてしまった現在、明らかにこの「鮎両」が世界最高のコスパに君臨しましております（笑）。当日はいつも通り、食いしん坊な老若男女が14名集まり、飲みや歌え（嘘です）やの大騒ぎ。大将の手による激ウマ魚介フルコースを堪能し、最後には7貫の寿司で完全にノックアウト。しかも寿司コースにピッタリの3種類の冷酒飲み放題（ビール、焼酎、ワインも可）もあり、吞兵衛の男女はグイグイっとここはやるしか無く、寿司が出されるくらいからの記憶は殆ど無いと言う、最高の夜を過ごしました（笑）。



務められ、最高の魚介類を確かな腕前で調理され、しかも驚くほどにリーズナブルな価格で提供されています。小生、短い（？）人生で最高のコスパ店は、武蔵中原にあった河豚屋「七ふ

令和7年 首都圏段戸会 世話人名簿

- | | | | |
|--------|----|----|----|
| (高3回) | 丹羽 | 鼎政 | |
| (高6回) | 有馬 | 弘修 | |
| (高7回) | 杉山 | 厚生 | |
| (高8回) | 田中 | 敏夫 | |
| (高9回) | 岡田 | 佐美 | |
| (高10回) | 宇佐 | 美栄 | |
| (高11回) | 太田 | 文宏 | |
| (高12回) | 永田 | 浩之 | |
| (高13回) | 鶴成 | 鏡国 | |
| (高14回) | 中磯 | 達博 | |
| (高15回) | 水谷 | 山田 | |
| (高16回) | 神谷 | 隆太 | |
| (高17回) | 大山 | 邦典 | |
| (高18回) | 伊藤 | 昌久 | |
| (高19回) | 福山 | 透郎 | 情報 |
| (高20回) | 天野 | 貴典 | 企画 |
| (高21回) | 辻村 | 邦夫 | 会長 |
| (高22回) | 小栗 | 恵子 | |
| (高23回) | 山上 | 俊文 | 広報 |
| (高24回) | 新庄 | 洋弘 | |
| (高25回) | 野々 | 山浩 | |
| (高26回) | 内田 | 寛 | |

- | | | | |
|--------|----|----|-------------|
| (高26回) | 戸田 | 譲三 | 会計監査 |
| (高27回) | 織田 | 利彦 | 副会長・企画・広報 |
| (高28回) | 山崎 | 正邦 | 会計 |
| (高30回) | 酒井 | 哲彦 | 会計 |
| (高31回) | 藤井 | 定智 | 副事務局長・企画 |
| (高32回) | 石米 | 満正 | 副事務局長・会計・企画 |
| (高33回) | 田原 | 由友 | 企画 |
| (高34回) | 堀内 | 二典 | 事務局長・企画・情報 |
| (高35回) | 鈴木 | 祐彦 | 副会長・企画 |
| (高36回) | 山本 | 敏正 | 広報・書記 |
| (高37回) | 板谷 | 美季 | 副事務局長・会員 |
| (高38回) | 井上 | 伸理 | 会計 |
| (高39回) | 小川 | 重智 | 副事務局長・企画 |
| (高40回) | 菅平 | 一幸 | 企画 |
| (高41回) | 稲葉 | 和司 | 会計 |
| (高42回) | 西川 | 武利 | 広報 |
| (高43回) | 渡辺 | 子妙 | 企画 |
| (高44回) | 中井 | 朋樹 | 情報 |
| (高45回) | 桃井 | 直貴 | |
| (高46回) | 大立 | 瑞 | |
| (高47回) | 山田 | | |
| (高48回) | 田中 | | |
| (高49回) | 山田 | | |
| (高50回) | 大立 | | |
| (高51回) | 山田 | | |
| (高52回) | 大立 | | |
| (高53回) | 山田 | | |
| (高54回) | 大立 | | |
| (高55回) | 山田 | | |
| (高56回) | 大立 | | |
| (高57回) | 山田 | | |
| (高58回) | 大立 | | |
| (高59回) | 山田 | | |
| (高60回) | 大立 | | |
| (高61回) | 山田 | | |
| (高62回) | 大立 | | |
| (高63回) | 山田 | | |
| (高64回) | 大立 | | |
| (高65回) | 山田 | | |
| (高66回) | 大立 | | |
| (高67回) | 山田 | | |
| (高68回) | 大立 | | |
| (高69回) | 山田 | | |
| (高70回) | 大立 | | |
| (高71回) | 山田 | | |
| (高72回) | 大立 | | |

- | | | | |
|--------|----|----|-------|
| (高46回) | 朝岡 | 大輔 | 広報 |
| (高47回) | 大川 | 博み | 会員 |
| (高48回) | 本藤 | いさ | 情報 |
| (高49回) | 佐藤 | 尚代 | 情報 |
| (高50回) | 丹羽 | 福佳 | 広報 |
| (高51回) | 鳥居 | 貴直 | 企画 |
| (高52回) | 清藤 | 康伸 | 企画 |
| (高53回) | 近井 | 尚博 | 企画・広報 |
| (高54回) | 石橋 | 直也 | 企画 |
| (高55回) | 岡田 | 敦子 | 企画 |
| (高56回) | 加藤 | 亮己 | 企画 |
| (高57回) | 川口 | 健太 | 企画 |
| (高58回) | 石川 | 多浦 | 企画 |
| (高59回) | 岩間 | 杉貴 | 企画 |
| (高60回) | 嶋田 | 文香 | 企画 |
| (高61回) | 本多 | 宏史 | 企画 |
| (高62回) | 杉浦 | 聡史 | 企画 |
| (高63回) | 鈴木 | 里蔵 | 企画 |
| (高64回) | 藤田 | 優武 | 企画 |
| (高65回) | 栗津 | 太郎 | 企画 |
| (高66回) | 河原 | 吾志 | 企画 |
| (高67回) | 吉兼 | 周 | 企画 |
| (高68回) | 鈴木 | | |
| (高69回) | 扶横 | | |
| (高70回) | 加藤 | | |
| (高71回) | 大池 | | |
| (高72回) | 犬部 | | |
| (高73回) | 南松 | | |

(織田)